

論文 / 著書情報
Article / Book Information

題目(和文)	駅建物およびその周辺環境の複合形式からみた現代都市東京の空間特性
Title(English)	
著者(和文)	稲用隆一
Author(English)	Inamochi Ryuichi
出典(和文)	学位:博士(工学), 学位授与機関:東京工業大学, 報告番号:甲第9699号, 授与年月日:2015年1月31日, 学位の種別:課程博士, 審査員:奥山 信一,篠野 志郎,大野 隆造,中村 芳樹,那須 聖,熊倉 洋介
Citation(English)	Degree:, Conferring organization: Tokyo Institute of Technology, Report number:甲第9699号, Conferred date:2015/1/31, Degree Type:Course doctor, Examiner:,,,,,
学位種別(和文)	博士論文
Category(English)	Doctoral Thesis
種別(和文)	審査の要旨
Type(English)	Exam Summary

論文審査の要旨及び審査員

(2000字程度)

報告番号	乙 第 号	学位申請者	稲用 隆一	
論文審査員	氏 名	職 名	氏 名	職 名
	主査 奥山 信一	教授	那須 聖	准教授
	篠野 志郎	教授	熊倉 洋介	連携准教授
	大野 隆造	教授		
	中村 芳樹	准教授		

本論は「駅建物およびその周辺環境の複合形式からみた現代都市東京の空間特性」と題し、以下の6章により構成されている。

第1章「序論」では、輻輳化および複合化が高度に進行した現代都市の代表として、世界都市東京が国内外から注目されてきたことを指摘し、そうした東京の都市景観として現象する空間特性は、建物立面の分節により形成される表層性と付帯性、および三次元的に分節された領域の重合により形成される積層性の3つの水準を検討することで把握可能であることを述べ、そうした空間特性を把握する分析対象として、東京の市街地化と連動して継続的に発展してきた都市基盤施設である東京都区内および近郊の主要駅およびその周辺の都市空間において、度重なる増改築や他用途との複合により成立している駅建物、それを貫通する通過空間、それらの周囲を取り巻く駅領域を取り上げることの妥当性を示し、本論文の目的が、そうした駅建物およびその周辺環境を構成する要素どうしの複合の形式を検討することで、現代都市東京の空間特性を把握するための枠組みを明らかにするものであること、すなわち本研究の目的と意義、研究の資料と方法、論文の構成と概要について述べている。

第2章「建物立面の複合形式からみた都市空間の表層性」では、駅建物の立面を対象に、隣接する建物立面どうしの外形スケールと分割スケールの連続の有無を分析し、それらの複合で形成される立面帯の連続性および隣接する他の建物立面との連続を検討することで、駅建物の立面が隣接する建物立面と視覚的に同化する定型的なパターンが位置づけられること、およびそれら個々のパターンの性格は、第一義的には分割スケールの近似により形成される建物単位を横断する局所的なまとまりが個々の建物立面のアイデンティティを埋没化させ、そこに外形スケールの近似により発生する連続性の強弱が関与することで類型化されるという傾向を明らかにしている。

第3章「通過空間の複合形式からみた都市空間の付帯性」では、ラチ外コンコースなどの駅建物を通り抜け可能な通過空間を対象に、通過空間の端部における壁面の性質および空間のスケールと、通過空間内部における奥行きをもった付帯空間の配列との複合によって、通過空間と都市空間との連続性を検討した結果、通過空間内部における付帯空間の配列については、奥行きの異なる空間が多方向に連鎖することで強い連続性が形成されるものが多く、そうした連続性が端部に形成される通過空間では、その壁面の性質と空間のスケールの双方が駅建物の立面とも連続することで都市空間へと拡張する傾向を明らかにしている。

第4章「駅領域の複合形式からみた都市空間の積層性」では、駅建物とそれに近接する建物群に囲まれた駅領域のなかで、三次元的に分節される面的なまとまりを構成面として抽出し、近接する他の構成面との断面構成の複合を検討した結果、駅領域の構成面は近接する構成面どうしの断面的な重合関係によって領域的に分割される定型的なパターンとして位置づけられること、特に近接する構成面が上方にある場合に強い領域的な分割がみられること、また、同一平面上あるいは上下両方向に構成面が集積する領域では近接関係が領域の一部に偏在するのに対して、上方のみあるいは下方のみに構成面が集積する領域では近接関係が領域周囲の様々な箇所で一様に形成されること、さらにそれら構成面の分節パターンの集積として各領域の立体的な構成を類型化しうる領域構成のネットワークについて記述可能であることを明らかにしている。

第5章「駅建物およびその周辺環境における状景の複合形式からみた東京の空間特性」では、駅建物の立面帯とそれを貫通する通過空間との連続性、およびそれらが接する構成面の領域的な性格との関係を検討することから、駅建物およびその周辺環境の空間特性を総合的に考察した結果、都市空間を規定する建物立面とその空間的活動を保証する領域との複合により形成される状景に関する11の構成類型を抽出し、それら個々の類型は、周囲に対して建物立面のみが自律しつつ前面の領域と完結した関係を取り結ぶ古典的な形式と、建物立面が周囲と同化しつつその内側の通過空間とも連続を示し、かつ周囲に複数の領域が立体的に集積する現代的な形式を両極とした評価軸のうちに位置づけられることを明らかにすると同時に、それら特徴的な状景は東京の都市空間一般へ敷衍化しうるものであることを指摘している。

第6章「結論」では、以上各章で得られた結果をまとめ、本論文で得られた知見を総括している。

これを要するに、本論文は、世界都市東京の都市空間のなかでも、資本の集中が顕著な駅建物およびその周辺環境を分析対象とし、その空間特性を規定する建物立面の連続と領域の複合形式を検討することで、漸次的な更新を繰り返す東京の都市空間において現象する状景の景観論的メカニズムを解明し、現代都市空間を把握する認識単位と空間構造評価の指標を提示したもので、工学上および建築学上貢献するところが大きいことから、博士(工学)の学位論文として十分な価値があるものと認める。